

原木市場及び製材工場の実態調査を実施しました

11月16日、17日に原木市場、製材工場合わせて6箇所の需要調査を実施しました。このうち、2箇所の調査結果を報告します。

●青森県森林組合連合会 津軽木材流通センター

広葉樹等の付加価値の高い採材方法や樹種ごとの需要動向などを調査しました。11月27日に予定されている「県産優良材展示即売会」に向けて様々な樹種が展示されていました。現在、需要が高い樹種は、ナラ・オニグルミ・ヤマザクラ・イタヤカエデなどになっていました。ロシアからナラ系の輸入が止まっていることから、ナラの需要が高まっているとのことでした。

付加価値の高い採材方法は、元玉に限り直材であれば長く採材する(2m20cm以上)こと。国有林材の良いところとしては、山の奥で育ったおかげで目詰まりが良く品質の良い木が多いとのことでした。また、近年被害が拡大している「ナラ枯れ」の被害木を販売できるか質問したところ、ナラはウイスキーの樽として使われることが多いため、安全性の問題から販売することは出来ないと回答がありました。被害を受ける前に伐採し、利用していくことが必要とのことでした。



●ファーストプライウッド株式会社

納入される原木の品質・規格、年間消費量などについて調査しました。単板積層材(LVL)を年間約144,000m³製造している大型工場であり、年間の原木消費量は約250,000m³とのことでした。使用している原木の規格は、径級18~60cm(平均28~30cm)、長さ2m・4m、4mの原木は工場では2mに玉切りし使用しているとのことでした。製造の過程で桂剥きするため、節の影響はないようですが、虫害材は穿孔の穴が開いているため製品の強度が下がることから使用出来ないとのことでした。



国有林に求められていることは、原木の安定供給、市場にあまり出回らない樹種・規格の供給であると感じました。引き続き、原木の安定供給に向けて取り組んでいきます。

工場見学に参加しました

Bグループ 鈴木彩子 成田拓矢 加藤美月

令和5年11月16日から17日に行われた工場見学では、秋田県と青森県あわせて計6件の工場を回りました。Bグループでは仕組材や木材チップを製造する十和田燐寸軸木株式会社さん、秋田杉で桶樽を作る有限会社日樽さんについてレポートを作成します。

十和田燐寸軸木株式会社

十和田燐寸さんでは初めに代表取締役社長の波紫(はし)さんから会社の沿革や概要を聞きました。創業当初はマッチや割箸の製造をしていましたが、時代に合わせて仕組材・梱包材の製造へと営業主力を転換させ、取引実績は全国に及びます。その後見学させていただいた工場は、製材ライン、原木チップラインなど複数に分かれており様々な機械が並んでいました。中には東北で初めて導入された、異なる形状や寸法の原木を自動で効率的に処理することができるロボット式ツインバンドソーもありました。原木から仕組材・梱包材になるまでの流れを教えてくださいました。

仕組材・梱包材の寸法は顧客のニーズに対応しているため、ミリ単位で少しずつ違うとの説明があり、寸法規格の管理だけでもかなりの苦勞がうかがえました。



製材の様子



説明の様子

有限会社日樽



鉦とハンマーで丸太を割る工程



完成した樽

日樽さんでは樽の製造工程を見学させていただきました。通常桶樽は抗菌性、耐久性に優れている赤身を使用し、蓋に白太を用いるそうです。

チェーンソーで適度な大きさにカットした丸太を鉦とハンマーを使って割り、乾燥させた赤身の形を整えて隙間がないように並べ、タガをきつくかけることであっという間に完成し、その職人技に職員一同感心しておりました。

タガに使用する真竹は京都から取り寄せなければならない、安定供給も難しいことから今後の課題であると伺い、伝統工芸ならではの苦勞が感じられました。

日樽さんから「桶樽製品は見た目の美しさと強度が特徴」と説明がありました。そのためには高齢樹であること、節がないことが重要であり、慎重に原木を選んでいるとのことでした。

十和田燐寸軸木株式会社さんでは年間の原木使用量のうち国有林材を約4割使用していただいております。これからも良質な秋田杉の継続的な供給と原木の安定供給、また、道路状況の改善を図り伝統工芸の保存と林業の発展に繋がりたいと思います。

原木市場及び製材工場の実態調査

米代東部森林管理署 総務グループ 佐藤 佑香
業務グループ 川浪 利公
業務グループ 利光 顕史

【はじめに】

この調査は、原木市場及び製材工場への聞き取りを通じて、青森ヒバ・秋田杉の需要や用途等の現状について調査し、現在の需給に関する課題を知り、その対策について考察することを目的としています。

〔青森県木材協同組合〕



(写真：青森ヒバの原木)

取扱い樹種は青森ヒバであり、青森県内の各森林管理署から原木を仕入れています。また青森ヒバの利用拡大に努めており、青森県の各市町村に県産材の利用を呼びかけています。

近年では良質なヒバが減少し、材の低質化が顕著になっています。市場の動向は心持ち材や土台角の14~28cmが中心ですが、低質材はバイオマス燃料として使用されており、ブランド材としての青森ヒバの現状を憂慮しています。

そこから良質なヒバの育成だけでなく、低質のヒバの新たな利用方法も考案し、既存の利用に加え、下駄箱の天板や入浴剤、石鹸などヒバの抗菌性や香りを活かした提案を行い、青森ヒバの付加価値を高める取組をしています。

〔株式会社沓澤製材所〕

取扱い樹種は秋田杉であり、住宅の下地材を中心に多種多様な製品を製造しています。今年度、当署では国有林材の安定供給システムによる協定で、3.65m材の原木を販売しています。これは、住宅の在来工法では、尺貫法を用いているためです。

また、伝統的かつ優良な桶樽の製材にも力を入れており、他製材所にはない技術と設備によるスギ製材端材の利用や、現代のデザインを取り入れた製品の開発も行っています。



(写真：桶樽の製作所)

最近では、地元の小学校と連携しながらひまわり油を使用した蜜蝋ワックスの製作を行ったり、自社の製品カタログに秋田杉の木屑で作った香料とインクを混ぜて印刷し「秋田杉が香るパンフ」として宣伝したりするなど、製材所や秋田杉の新たな価値を創造する取組を行っています。

【まとめ】

今回の調査を通じて、ブランド材の新たな需要を掘り起こすため、各所では様々な取組をしていることがわかりました。

当署としても、今後は、**高国**の高齢級秋田杉の安定供給や、ブランド材の新たな利用方法の普及活動を通じて、ブランド材の新たな価値創造に貢献していきたいと思えます。